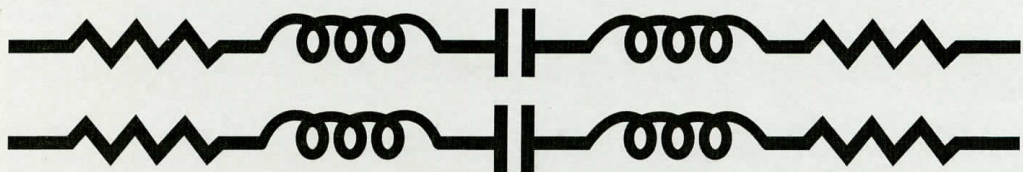


岩手大学電気電子情報科会誌

きたかみ

第 59 号

2013 年 3 月 発行



—— 年会費納入のお願い ——

年会費につきましては、卒業後年 1,000 円の年会費を 10 年ごとに 1 万円納入していただいております。第 1 回目のお願いを終了し、その後は卒業後 10 年に達した方に依頼の文書等を発送しております。

しかしながら平成 14 年以前の卒業の方で、納め忘れの方が大変多くいらっしゃいますので、再度納入のお願いをさせていただきます。

会の運営上、是非ご協力のほど、お願いいたします。

同封の郵便局の赤い振込用紙に卒業年・学科・氏名・電話番号をご記入の上振り込んで下さいますよう、よろしくご願ひいたします。

目 次

会長挨拶	会長 柏葉安兵衛	1
退職した先生からの寄稿		2
電気電子工学コースの近況	電気電子工学コース長 長田 洋	4
情報システム工学コースの近況	情報システム工学コース長 西山 清	5
平成 24 年度総会特別講演	寺井正行	6
東京支部からの寄稿		8
佐藤利三郎先生を偲んで		12
高木三郎元会長を偲んで		14
佐藤源美元会長を偲んで		15
草刈賞 第 9 回（平成 23 年度）草刈賞受賞者		16
小笠原拓君追悼文		18
《支部だより》 平成 24 年度東京支部報告		20
平成 24 年度仙台支部報告		21
平成 24 年度盛岡支部報告		22
平成 24 年度電気電子情報科会総会		23
平成 24 年度電気電子情報科会総会議事録		24
平成 23 年度決算書		25
平成 24 年度予算書		25
平成 24 年度電気電子情報科会役員名簿		26
平成 24 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿		27
平成 24 年 年表		28
総会添付資料		30
岩手大学電気電子情報科会会則		31
トピックス・編集後記・お知らせ		32
平成 25 年度総会並びに懇親会開催のご案内		裏紙

ご 挨拶

会長 柏葉安兵衛（昭和38年電気卒）



会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。雪に輝く岩手山の姿は、盛岡を遠く離れている会員の皆様にも学生時代の思い出として残っているかと思えます。

会誌「きたかみ 59号」をお届けいたします。今年の総会において、もう一期だけ会長をお引き受けすることになりました。皆様のご協力をいただきながら会の運営にあたりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

一昨年3月の大震災津波と原発の大災害から早くも2年あまり経過しましたが、復興はあまり進んでいない観があります。母校岩手大学では全学一体となって様々な形で三陸沿岸地域の復興支援を行っており、その成果が期待されています。被災者が一日も早く落ち着いて生活できる環境が整うことを願っています。津波災害で、岩手大学では電気電子・情報システム工学科の当時2年生の学生さん1名が亡くなりました。この3月で卒業して本会の会員になり、大いに活躍が期待されたところですので大変残念な過ぎりです。ご冥福をお祈りいたします。同級生から追悼文を寄せていただきましたので、ご覧になってください。

一昨年10月に電気電子情報科会創立70周年記念式典・祝賀会を東京で開催いたしました。昨年9月には工学部の同窓会「一祐会」の創立70周年記念式典・祝賀会が盛岡で開催されました。本会からも50余名の会員が参加し盛会でした。本会の前身「盛岡高工電気科会」も「一祐会」も共に昭和17年（1942年）の創立ですが、本会は1月1日、一祐会は9月16日の創立となっています。

昨年、元会長お二人がお亡くなりになりました。第5代会長の佐藤源美氏（専門2回1942年卒）と第6代及び9代会長の高木三郎先生（同）です。佐藤源美氏は国鉄にお勤めで、私が卒業の頃の本会会長でした。国鉄後輩の阿部長一氏（専門4回、大学4回卒）から追悼文が寄せられています。高木先生は本学教育学部技術科教授として電気をご担当になり、たくさんの方の中学・高校の先生方を教育界に送り出しました。さらに、二度にわたって本会会長をお務めになり、会の発展にも大きな貢献をなさいました。技術科で先生と長年ご一緒であった辻野哲司氏（機械工学科41年卒、本学名誉教授）から追悼文を頂戴いたしました。両元会長のご冥福をお祈り申し上げます。また、故佐藤利三郎先生（専門1回卒）を偲んで、太田原功先生（大3回卒）と久保田賢二先生（大15回卒）からご寄稿いただきました。

電気電子・情報システム工学科、情報システムコースの渡邊孝志先生には、昨年3月をもって、定年によりご退職になりました。渡邊先生は、昭和55年に日立製作所から当時の情報工学科に赴任され、爾来32年の長きにわたって教育研究に当たられ、先生のご薫陶を受けたたくさんの卒業生は各地で大いに活躍しております。先生から本号にご寄稿いただいております。

昨年4月1日から工学部長に西谷泰昭教授が就任しています。西谷先生は電気電子・情報システム工学科情報システムコースの教授で、平成12年4月に群馬大学工学部から本学の情報システム工学科教授に迎えられました。岩手大学では情報工学系初の工学部長で、ご就任をお祝い申し上げますと共に今後のご活躍をお祈りいたします。

早いもので、草刈 遜先生ご生誕100周年を記念して平成15年11月に創設された「草刈賞」は、この3月で10回目の受賞者が誕生いたします。この間、学科の先生方のご協力によって学生のあいだに広く知られるようになり、関心を集めています。発足当初は10年間の実施を計画していましたが、皆様のご協力により今後も継続できる見通しです。

会員の皆様のご健康とご健闘を心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

－退職した先生からの寄稿－

岩手大学工学部での教員生活を回想して

渡 邊 孝 志



本学工学部には、1980年4月情報工学科に助手として着任して2012年3月電気電子・情報システム工学科で定年退職するまで、32年間在職しました。その間、本学関係者の皆様には公私に亘り大変お世話になりました。心から御礼

申し上げます。この度、本誌での貴重な紙面をお借りする機会を得ましたので、ささやかながら私の思い出と感慨を述べさせていただきます。

着任時の情報工学科は4つの小講座からなり、所属先の応用情報学講座は教授が平塚篤先生、助教授が横山隆三先生でした。早速、横山先生の手がけていた「三陸沿岸リモートセンシング観測プロジェクト」に参加しました。これは航空機で撮影した多重分光（マルチスペクトル）画像を用いて三陸沿岸の水質環境調査を行うもので、沿岸の市役所、町役場、漁業協同組合、水産試験場、保健所などから総計100名を超える方々が無報酬で参加する大規模なものでした。これを一人で組織された横山先生の力量には驚嘆しました。私も船外機のサップ船に乗って湾内の海水温などを測定して廻りながら、横山先生の言う「研究課題は現実の問題から掘り下げよ」という研究姿勢を実体験しました。その後、このプロジェクトは岩手県議会の超党派による支援を受け、文部省から破格の予算処置がなされ、1986年2月岩手大学にリモートセンシングデータ解析室が設置されて、漸く衛星画像データ処理が可能な研究設備が整いました。横山先生からはリモートセンシングの陸域研究を手伝って欲しいと言われていましたので、多重分光画像分類処理の研究に取り組みました。

多重分光画像の分類処理はそれまで画素ごとの画素単位分類が主流でしたが、分類精度が高くないという欠点がありました。これに対して、

複数画素による空間文脈的情報の利用で分類精度の向上を狙う文脈的分類が注目を集めており、幾つかの手法が提案されていました。しかし文脈的分類法には、その有効性が定量的に示されていない、実利用する上での問題点やノウハウが明確でない、という課題がありました。そこで、2チャンネルの擬似LANDSAT画像を人工的に作成し、これによって各文脈的分類法の性能を定量的に比較評価するとともに、より高精度な新しい2つの文脈的分類法（拡張型適応的分類法、強制収束判定付き確率的弛緩法）を開発しました。これらの評価実験は当時の大学院修士学生の鈴木斉さん（現在、NEC）が担当してくれましたが、リモートセンシング学界で注目される研究成果となりました。

これと同時に、民間企業と共同して会話型画像処理システムMIPS/Iの開発を行いました。相馬孝志技官の協力を得て、当時市販されていた高性能マイクロプロセッサM68000（16ビット、8MHz）をプラットフォームにして、低価格で手軽に操作可能な汎用性のある画像処理システムを製作しました。開発には横山研究室の全学生が参加して、わいわいと賑やかな雰囲気の中で進められたことを懐かしく思い出します。付加価値を付けるために、当時かなり高価であったフルカラー表示装置（1670万色同時表示可）に代わって、安価なカラーマップ表示装置（任意256色が同時表示可）を用いたフルカラー画像近似表示法を開発しました。この手法はオムロン、東芝、富士通などの企業で採用されて好評でしたが、肝心の画像処理システムの方は残念ながら売れませんでした。商品開発は難しいということを痛感しましたが、開発した画像処理ソフトウェアは、その後、私の研究室の画像処理研究で大いに活躍してくれました。

横山先生のお供で岩手県栽培漁業センターを訪れた際に、鮑（アワビ）稚貝の生育状況を画像処理で自動モニタリングできないか、との相

談を受けました。鮑稚貝は楕円形状ですが、稚貝は水槽の中で多数が互いに重なり合って成育するので、各稚貝は一部しか見えません。文字認識では1文字ずつの切り出しが容易ですが、鮑の場合は鮑単体の切り出し自体が困難であり、一段と難しい画像認識問題です。そこで、以後の主たる研究テーマを「隠蔽に強い画像認識手法の開発」に決めました。色々と文献を調査する中でハフ変換という手法を見つけました。元々は直線検出用に考案された手法で、それが円、楕円、一般図形と拡張されてきましたが、直線以外は実用的な手法となっていませんでした。試行錯誤する中で、成功の鍵となるのは各エッジ点における接線情報の積極的利用にあると見極めを付けました。そこで、微分処理的手法によらずに、不連続輪郭線画像から接線情報を高精度かつ安定に抽出する手法の開発を行いました。従来手法では平均検出精度を10度以下とすることは至難でしたが、我々の方法では2.5度以下にできました。早速これに基づいて接線情報を利用した楕円検出法を開発して、従来手法よりも高速で、輪郭線の半分以上が欠落している欠損楕円もロバストに検出できる手法が実現できました。教授に昇任後、ソニーに入社していた卒業生の木村彰男さんが助手として着任されたのを機会に、相似変換された任意図形の認識手法であるBallardの一般化ハフ変換(GHT、1981年)の高速化問題に取り組みました。その結果、Chord Tangent変換(1995年)を上回る高性能なGHT改良法が開発できました。続いて、その一般化であるアフィン変換不変な任意図形検出法の開発に取り組み、実用レベルのアフィンGHTを世界に先駆けて開発することに成功して、ハフ変換による画像認識に関してはかなり自負できる研究成果を得ました。

さらに、指紋認証よりも難しい、成長変化する生体テクスチャ(牛鼻紋)の個体認証問題を扱い、弾性的グラフマッチングを用いた新しい認識手法を開発しました。また、等高線地形図からの三次元地形データ自動生成システムの開発を行い、最終的に民間企業に技術移管して実用化しました。この他、画像処理と画像認識の分野を中心として、ISEフィルタによる輪郭線

の高精度抽出、エッジの線分近似と図形認識への応用、エッジに注目した画像拡大、図形骨格によるロバストな画像認識、独立成分分析の画像処理応用、誤差逆伝播学習法の改良、単視点画像からの三次元情報の復元処理など、多くの研究課題を手がけました。それらの内には、原著論文になったものもあればそうでないものもあります。そのどちらになったにせよ、研究室で教職員・学生の皆さんと一緒に討論して過ごした毎日は大変楽しいものでした。悔いのない充実した教員生活を送れたのは全く皆さんのお陰です。ここに改めて深く感謝致します。

また、1992年情報システム工学科に改組される際にはカリキュラムの再編を任され、情報処理学会が提唱する標準カリキュラムJ90(コンピュータ科学を基盤とするもの)に準拠するよう奔走した日々も今では良き思い出です。

私は学生の頃から「人間の認識能力」について関心がありました。大学での研究課題もその周りで選んできましたが、現時点で解明できたことは僅かです。高度で柔軟な認識を実現する根本原理がまだ分かっていません。総合的に人間並の人工知能は実現できるのか、コンピュータは意識をもてるのか、等々。これらは次世代の研究者の挑戦的研究課題であり続けるでしょうし、その解明を楽しみにしています。

定年が近づくとつれ大学の管理運営の一部に拘る機会が増えました。私の経験では、大学人は意外と独善に陥り易い、というのが感想です。言うまでもなく、大学の使命は知の創造(研究)とその体系の伝承(教育)です。そのバランスの取れた運営は結局のところ構成員の「常識」によるしかありません。およそ複数の人間の利害が絡む問題にトートロジー(恒真)としての正解はなく、十分な議論を尽くした後では妥協して互いに我慢する、と言う姿勢が息の長い改革を成し遂げる唯一の術だと感じていました。最後は取り留めのない話になってしまいましたが、元教員の繰り言としてご容赦下さい。

末筆ながら電気電子情報科会の皆様のご健勝と一層のご活躍を心から祈念します。

電気電子工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 電気電子工学コース長 長 田 洋

電気電子情報科会会員の皆様におかれましては益々清栄のこととお慶び申し上げます。

今年、工学部改組から4年目の年となり、電気電子・情報システム工学科として初めての卒業生を世に送り出す予定です。長引く就職困難期の昨今にあって、当コースでは200社を超える企業からのご来訪、また800社を超える企業から募集をいただきました。その結果、就職を希望する学生に対しては95%が内定を頂戴することができております。これもひとえに会員の皆様がこれまで築いてこられた高い評価の賜物であり、心よりお礼申し上げる次第です。

毎年実施しております3年次学生の工場見学では、今年度は(株)東芝浜川崎工場、(株)NTTドコモ R&D センタ、三菱電機(株)情報技術総合研究所、(株)フジクラ佐倉事業所、NTT (株)横須賀研究開発センタ、岩手東芝エレクトロニクス(株)および東京エレクトロニクス(株)を見学してきました。訪問先では卒業生から心温まるお世話をいただきました。誠にありがとうございました。

研究に関しましては、小林宏一郎准教授が、「平成24年度日本学術振興会超伝導エレクトロニクス第146委員会賞」を受賞しました。超伝導磁束計の開発や生体磁気計測への応用の研究成果が評価されました。また、高橋和貴助教らのプラズマ推進機に関する研究成果が、Asia-Pacific の顕著な物理学論文を紹介する雑誌、「Asia-Pacific Physics Newsletters」に取り上げられました。さらに、柏葉安兵衛名誉教授(科会会長)が、「応用物理学会東北支部貢献賞」を受賞されました。先生の支部の運営・発展に関する貢献や、学術活動を通じた地域産業の発展に関する貢献などが評価されたものです。

また、東日本大震災の復興を加速するための復興促進プログラム(科学技術振興機構)に、本コースからも、大坊真洋准教授、本間尚樹准教授、高木浩一教授、長田の4名の研究テーマが採択されました。震災から2年が経過するなか、多くの人々が復興に懸命の努力を注いでいます。本学の研究が少しでもその復興に役立つ

ことを祈念します。

コース人事に関しましては、今年度より三浦健司先生が当コースに助教として赴任されました。三浦先生のご専門は「高周波電磁波制御を実現する複合デバイス」であり、通信機器等に应用できる、新しい高周波デバイスを作り出す研究に取り組んでいます。携帯通信機器等はますます多様化していくと思われまますので、今後の活躍が大いに期待されます。

また、藤原民也教授、山田弘教授、谷口宏教授がこの3月で定年退職されます。藤原先生は1975年4月より38年間、山田先生は1979年5月より34年間、谷口先生は1973年4月より40年間、いずれも四半世紀年以上の長きにわたり当コースとその前身である電気系学科を支えていただきました。会員の多くの皆様もご存知のように、藤原先生、山田先生、谷口先生は研究と教育に大変熱心に取り組まれ、優しいだけでなく、時には厳しく指導して下さいました。我々は、ご退職する3名の先生方を含む諸先輩方が守ってきた伝統を、しっかりと引き継ぎ、伝えていかなければなりません。

昨年6月5日に文部科学省より「大学改革実行プラン」が示されました。そこでの中心的な概念が「ミッションの再定義」です。これは大学や各学部の強みを伸ばすという方向での選択と集中を意味するとも受け取られますが、国立大学の使命は、誰もが学べる地域の総合的な知の拠点たることと、それに裏付けされた優秀な人材の輩出であることに異論はないと思われまます。今年度も当電気電子工学コースには、学部生63名(1年後期よりコース配属)、編入生3名、博士前期課程生36名、同後期課程生1名が入学しました。新たに迎えた約100名の学生を立派な人材に育て上げることを最大のミッションとし、今後も教職員一同一丸となってより一層の努力を重ねて行く所存です。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈り致しますと共に、今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

情報システム工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 情報システム工学コース長 西山 清

電気電子情報科会会員の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

今年は一祐会が創立70周年を迎えた記念すべき年でした。また、工学部6号館の隣に増築された総合教育研究棟（環境系）に復興祈念銀河ホールと工房が完成しました。デザイン・メディア工学専攻の新たな拠点となる施設であり、今後の教育研究の充実が期待されています。

入試状況ですが、合併後は比較的安定に倍率が推移しています。昨年度から後期個別学力検査に初めて筆記試験（数学と理科（物理または化学））を課し、10倍近い応募倍率になりました。結果として、後期個別学力検査における本学科の偏差値もかなり高くなりました。また、来年度は大学院入試においてTOEICの利用を検討しています。

最近では、高校への出前講義も盛況であり、今年度は、青森県立三沢高校、大船渡高校、気仙沼高校、盛岡市立高校に出向き講義を行いました。また、8月と10月のオープンキャンパスの他にも、随時高校からの（最近は中学からも）見学を受け入れています。

システム理工学系講演会では、パナソニック(株) R&D本部の西川剛樹氏に「テレビ会議「HDコム」における音響技術開発－收音技術の基礎から応用まで－」、徳島県危機管理部南海地震防災課副課長 坂東淳氏に「徳島県災害時情報共有システムの構築について」に関する講演をして頂きました。

今年度の就職状況ですが、本コースではほとんどの学生が企業に自由応募していますが、10月時点で博士前期課程の学生はほぼ内定を取っています。一方、学部学生には就職活動中（公務員志望を含む）の学生がまだ見受けられます。最近の傾向としては、日本人学生は厳選される傾向が続き、ある一定の基準以下の学生の内定が厳しくなっています。この傾向は今後とも続

くものと思われます。

教育面では、工学入門科目（数学、物理など）が強化され、学生の基礎学力の底上げに期待が掛っています。また、来年度からプログラミング言語入門を新たに開講する予定です。プログラミングへの関心を高め、2年次以降のプログラミング演習に意欲的に取り組めるように工夫し、プログラミング能力の向上を目指しています。

研究面では、科学研究補助費や外部資金の獲得も活発になっており、受賞や学術交流も増えています。

1. 受賞

システム制御情報学会論文賞（2012年5月22日）：若佐裕治、田中幹也、明石卓也、

「Particle Swarm Optimization アルゴリズムの安定性解析」、システム制御情報学会論文誌、第23巻、第1号、pp.9-15（2010）

日本光学会奨励賞（2012年10月23日）：M. Sasamoto and K. Yoshimori, "Three-Dimensional Imagin Spectrometry by Fully Passive Interferometry," Optical Review, Vol. 19, No. 1, pp. 29-33（2012）

2. 学術交流

岩手大学と中華人民共和国大連理工大学の学術交流協定が更新されました。元々工学部との協定でしたが、今回は大学間の協定に昇格されました。

人事では、情報システム工学コースの厚井裕司教授が今年度をもちまして定年退職されます。

最後に、情報システム工学コース一同一丸となり、社会が求める人材育成により一層の努力を重ねて行く所存でおります。つきましては、会員の皆様には益々のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

—平成24年度総会特別講演—

創立70周年記念祝賀会を終えて

寺井正行（昭和41年電気卒）

電気電気情報科会創立70周年記念祝賀会を開催したのは平成23年10月29日で、この時の経緯や概要は平成24年3月発行の記念事業特集号「きたかみ」58号でご報告しました。

平成24年6月の科会定期総会でも講演という形でご報告しました。また、10月には科会東京支部の年次大会でも15分程ご報告しました。

平成22年12月に拝命した創立70周年記念祝賀会実行委員長のお役目もこれで万事果たし終えたと思っておりましたが、甘かったです。

この原稿を書いているのは準備活動開始から2年後の平成25年1月です。今更同じような内容のものをご覧いただくのも気が引けますが、さりとて名案がある訳でもなく、締め切りが近付いてきて止む無くパソコンに向かっていきます。

私の報告を聞いてくださった方は、科会総会で30名弱、東京支部の年次大会で40名弱でしたので、当日使用したパワーポイント風の画面をこの紙面に載せて多くの方にご覧いただくのも一つの方法かも知れませんが、48画面＋動画＋音楽で、とてもすべては載せられません。あれも言いたい、これも外せない、と欲張りな性分が出て詰め込みすぎ、報告講演当日も予定時間をオーバーして司会の方にご迷惑をおかけする不始末でした。

講演の趣旨は、科会創立70周年記念祝賀会の経緯と実施内容のご報告で、これについてはすでに「きたかみ」58号の紙面と、添付したDVDで全会員にご報告してあると考えておりますので、本稿では補足程度に記します。

当日使用した画面で、**要旨**を示します。

要旨	
.....
1.	祝賀会の概要
2.	映像記録・DVD配布
3.	愛唱歌の発掘
4.	鎮魂の時間
5.	今後について
.....

「きたかみ」58号には間に合わなかった、**祝賀会計**も報告しました。その画面です。

要は、記念式典会場費や「きたかみ」添付のDVD作成費などを記念事業会計から支出した、ということです。

祝賀会会計について	
.....	
収入	1,744,000円
祝賀会参加費	1,281,000円 7,000円*183名(含:来賓13名)
協賛者賛助金	463,000円 2,000円*229名、5,000円*1名
支出	1,744,000円
祝賀会会場費	339,347円 室料、器材賃料など
記録映像等作成	334,837円 DVD/CD/写真作成費など
事務・通信費	142,525円 案内郵送料、プログラム作成など
お土産・御礼	123,360円 せんべい190個、「さんさ」への御礼
注1:	会場費総額 471,020円の内、131,673円本部会計負担。
注2:	「きたかみ」添付DVD作成費 307,650円は、本部会計負担。

実施内容の企画から実行までの進め方は、祝賀会実行委員会事務局（東京支部）にアイデアを持ち寄って原案作成し、次に記念事業実行委員会（盛岡・理事会）に提案してご意見を伺いゴーサインを得る、という段取りでした。

この方法は、理事・記念事業実行委員と、東京支部役員などの祝賀会実行委員会事務局との意思疎通を密にし、皆さんのお知恵を拝借して具体化していくには有効な方法でした。

4. の**鎮魂の時間**を例に挙げてみます。

6月11日の記念事業実行委員会で次のように提案しました。

「東日本大震災と原発事故・放射能被害の収束が見えないなか、祝賀会でも被災者追悼など何らかの行為が必要ではないか?」と。この時は、「大学としても工学部としても行動しているので、科会としては必要なし。」となりました。

しかし、後日、齋藤健さんから「小野寺瑞穂さんが盛岡弁で詩を朗読している。NHKで放送されていた。被災者や聞いた人みんなに勇気を与えるものだ。祝賀会でも使えるのではないか?」とご連絡をいただきました。

そこで、詩の朗読音源を管理している大学教授にお断りして、9月3日の記念行事実行委員会でデモ版をご披露、再度ご意見を伺いました。

この時は、具体的なイメージがあったからか、

前向きのご意見を多数いただきました。

- バックの音楽は「イーハトーブの風」が良い。
 - 小野寺さんの朗読は、生でお願いしたい。
 - 二戸ちゃんいるどスクール園児の歌も使おう。
- などなど、これらを盛り込んで具体化しました。

小野寺さんとは祝賀会当日朝に数分打ち合わせただけでしたが、小野寺さんの経験と熟練の技でバックの音楽にもピッタリの朗読をしていただきました。

参加者が急増して狭苦しい会場で申し訳ありませんでしたが、思いがけない感動的な場面になったと思います。参加者の方には思い出していただけるのですが、DVDで見ただけの方にも当日の様子を感じ取っていただければ幸いです。

このように、今回の進め方は関係者の知恵と力を結集した反面、**予定以上の時間**がかかるという不具合もありました。

一例を挙げると「きたかみ」58号へのDVD添付方法については、「同封するだけで良い。」「いや、袋の中で動かないよう固定すべきだ。」「重量は？」など、判り易いテーマだったからか発言が相次ぎました。そのために、本来は理事会でしっかりと検討すべき事項であっても、十分に検討されないままに時間切れで先送りされてしまう、と思うようなことがありました。

祝賀会準備の過程では、図らずも今後の科会活動にとって避けては通れない重要なテーマが見えてきました。これは、「きたかみ」58号にも記し、報告講演でも「5. 今後について」として報告したことですが、記しておきます。

1. 今後は、5年あるいは10年ごとの周年記念行事を恒例化しておく必要がある。
2. 科会会員の居住地は、岩手県30%、宮城+青森24%、1都3県では20%である。行事開催地や支部活動に考慮する必要がある。
3. 一祐会DBより同期会連絡網が有効だった。同期会を科会の基礎組織にする必要がある。

「検討時間がない」とか「古くて新しい問題だが根本的な解決策が見出だせない」とかいう理由だけで先送りしていると、何時までたっても解決しないことは明らかです。継続的な検討を積み重ねて、少しずつでも進展させることが必須だと思うのですが、「70周年を契機に前進した」と言えそうな事項が無いのは残念なことだと思っています。

記録映像のDVDを、「きたかみ」に添付して在学生会を含む会員全員に送ることができたことは、画期的な成果だと思えます。

祝賀会の映像記録を残そうと準備中の7月、阿部源祐さんから送られてきたDVDは、科会50周年記念行事の記録VTRをDVDに変換したモノでした。

「70周年記念祝賀会も、これ位立派にやれよ!」「映像記録も、キチンと残せよ!」ということだったので、この大先輩の叱咤激励と、映像技術の進歩と、多くの方々のご協力で「きたかみ」添付にまで漕ぎ着けました。

今回は企画倒れにはなりませんが、インターネット環境を利用して、盛岡との“二元ライブ祝賀会”を構想した時期もありました。

- 東京まで来られない方々のために、盛岡会場を作って、東京と双方向にライブ中継する。
- “岩手大学の今”を、学内・構内からの動画放送で東京会場や在宅の方にも見ていただく。
- 一祐会館に展示されている記念品・思い出の品々をライブ映像で紹介する。

こんな企画でした。

これぞまさしく“電気電子情報”を冠する会に相応しい内容だ、という意気込みでした。

下見のつもりで訪れた一祐会館の資料室は、大震災後の混乱のためか、先輩諸侯の思い出の詰まった品々が物置のように雑然と置かれていました。歴代工学部長のお写真がズラリと掲額されておりましたが、右に左に、やや下向きに、傾いたまま光を反射しておりました。

草刈先生のお写真のガラスが反射して、メガネの奥からキラリと睨んでおられる、そんな気がして、そそくさと資料室を出ました。

この時に、ライブ中継の意気込みも消えてしまいました。

“電気電子情報”に相応しい、映像技術を駆使した行事は、次世代に期待します。

今回発掘した高等工業学校時代と工業専門学校時代の二つの「電気科道謡歌」は、在学生会・卒業生に、末永く歌い継いでいただきたいと切望しております。

“未曾有の大震災”からの復旧・復興の道筋も定かでない時期での開催でしたが、科会の“古希”70周年を、会員諸兄のご賛同とご協力とで楽しく祝い、“縁”を確認し強めあうことができました。

— 東京支部からの寄稿 —

学び舎を巣立って半世紀

四 戸 弘 道 (昭和 37 年電気卒)



1962 年 3 月 学び舎を巣立ってはや半世紀。同期は 43 名ですが、5 名が鬼籍に入れ、38 名が健在です。卒業のとき、10 年後に会いましょうと誓って我ら同期は学び舎から巣立ちました。

1972 年 3 月、卒業時の約束どおり第一回の同期会が盛岡市繁温泉で開催され、以後、20 年後、30 年後と同期会を重ねてきました。

1982 年以降は 5 年毎になり、更に、2004 年以降は 2 年毎に同期会を開催、今までに 11 回同期会を開催しました。

ここで 2012 年開催の第十一期同期会について簡単に紹介します。

2012 年開催の同期会は首都圏（含む長野）在住の同期が中心となり同期会の準備、及び開催を取り仕切りました。

2012 年は学び舎を巣立って 50 年目という節目の年でしたので、集まって飲むだけでなく、50 周年記念大会とし、記念に相応しいことを企画しようと 2011 年 12 月の首都圏の忘年会で提案があり検討した結果、記念誌（約 60 ページ）発行と入学から今までの同期の集合写真や、スナップ写真などを DVD に収録する案が採用され、早速 2012 年 1 月から記念誌の原稿作成、資料や写真の収集を始めました。

記念誌は、「特別寄稿論文（5 名に執筆依頼）」、「同期生の近況報告」、「卒業研究報告の概要」、「同期会開催記録」、「同期会の歩み」、「同期生の住所録」、「岩手大学学生歌」、「思い出の写真集」といった内容に纏めました。

特に、思い出の写真集は集合写真を A4 に拡大して印刷し記念誌に綴じ込みました。入学時の集合写真、在学時のコンパの集合写真、研修

旅行時の集合写真や同期会の時の集合写真計 14 枚です。入学時の集合写真を見ると私も若いときがあったんだなと変に感心してしまいます。

DVD に収録した資料は写真がメインですが、記念誌に入れた集合写真を含め、在学時代及び同期会時の各種スナップ写真です。この写真集は 7 部構成として編集し、2 枚の DVD に収録しました。

「第一部：入学から 3 年次まで」、「第二部：見学旅行から卒業まで」、「第三部：同期会一回から七回まで」、「第四部：同期会八回から十回まで」、「第五部：番外編」、「第六部：ムービー」、「第七部：最近の盛岡」に纏めました。

DVD に収録した資料や写真でも在学時代や、卒業後の同期会の、そのときそのときのことが懐かしく思いだされます。

資料で特筆するのは昭和 33 年 3 月 1 日発行の岩手大学学生新聞です（私達は 33 年 4 月入学ですからまだ入学していない。入学試験を受験にきた同期生が入手）。

この新聞に岩手大学の各科別志願者数と倍率が掲載されており、電気工学科が 7.1 倍で機械工学科に次いで二番目の倍率であると書かれています。

写真集では、入江先生、太田原先生と区界や滝の上温泉にハイキングに行った懐かしいスナップ写真も入手できました。

残念ながら、今回収集できなかった同期会の集合写真もあります。第一回、第三回、第四回同期会の集合写真です。

第十一期同期会は 2012 年 10 月 24/25 日、長野県松代温泉で行った。24 日 / 25 日とも天候に恵まれ、楽しいひと時を過ごし再会を約束して長野駅前解散。この同期会で記念誌と DVD を参加者全員に配布しました。

還 暦 に 思 う

田 中 健 二 (昭和 49 年電子卒)



61歳を目前にして、還暦という言葉の意味がようやく身に染みてきている。還暦なりたてのころは、そうは感じなかったのだが・・・

編集部の方から「題」は何でも良いですという言葉を送り、それでは、勝手ながら、還暦の特権で、自分のこれまでを振り返り、自分の感慨の触りを書き残させていただけようかと心に決めた。

先日、本屋で「ビジネスモデル YOU」という本が並んでいるのが目に付いた。ベストセラーとなった「ビジネスモデル・ジェネレーション/ビジネスモデル設計書」の悪く言えば二番煎じの本らしい。オリジナルの本は、ビジネスのメカニズム、つまり「儲ける仕組み」を分析・創造する手法およびその実現の戦略立案手法などを述べている。「顧客に対して、何を価値として提供するか」、「その価値の創出のメカニズム」、「価値の提供のメカニズム」などなど、9つの要素に分け、全体として、儲ける仕組みがどうなっているかを分析あるいは創造するところから始まるが、これを特に「キャンバス」と名づけた図に展開して視覚化し、より具体的に検討を深めることができるようにした点がミソである。典型的なビジネスモデルのキャンバス例も何種類か紹介し理解を助けている。昨今は、エンジニアとしても、ただ、技術に打ち込むだけでは足りず、自分の仕事がビジネスという枠のなかで、どのような役割を演じているのかを意識しないと、安穏な一生を全うできない様相を呈してきた。さらに、もう少し視野を広げると、仕事以外の部分も含め、自分の役割というものを意識して生きることが大切だと言われる。冒頭で述べた「ビジネスモデル YOU」は、

前著がビジネス（事業）用だとすれば、こちらは、パーソナル版、自分自身の将来キャリアの設計図の検討に使える。

これも、ベストセラーのステイブン・R・コヴィー著「7つの習慣」の記述を引くと、物事を「緊急性」と「重要性」の二軸からなる、四象限のマトリックスに展開し、「緊急性が低い」「重要性が高い」象限を大事にすることを推奨している。

ともすると、目先の緊急アイテムを追っかけ回して一生の大半を使い切ってしまう。私もこの口だったと今更ながら反省！はせず、過去は忘れて、今後役に立てようとしている。

これに関連して、日本人は、欧米人に比べ、プライオリティー付けによるマネジメントが苦手という印象を持っている。

私の所属している会社での例ではあるが、海外のメンバーと一緒に（特に海外メンバーが取り仕切る）会議で、彼らは、必ずしもアクションを網羅的にフォローしようとしないのである。日本メンバーでの会議では、議論になったことについては、その全ての項目について、結論とその後のアクションを明確化しようとするが、そうはせず「どうでも良いことは」あえて触れずにおこうとする。日本人は、几帳面なのだろう。キッチリと議事録を取る傾向にあり、その議事録を関係者に確認すると、メンバーから「こういう議論もあったはずだ」などと、ありがたい指摘をいただき、非常に完璧な議事録とアクションアイテムリストができあがる。海外メンバーは、全て漏れなくカバーすることよりも、本当に大事なことに集中し、それ以外はやらない。

こんなことが、意外と心に残っている。私より若い多くの会員の皆さんに、私の抱くこの「感慨」が幾分でも参考になれば幸いである。

それでも電機業界

山内利明（昭和55年電気卒）



私は杉田先生の電気基礎研究室でご指導をいただきました。学問だけではなく、お茶の入れ方、電気溶接、野球、人生論など広くご指導頂き厚く御礼を申し上げます。

教授のお世話で今のパナソニックに就職し、研究室は強電でしたが、仕事は弱電になりました。当時松下通信に配属され最新の16ビットパソコンの開発に従事しました。マイクロソフト社のベーシックも搭載することになり、今は無き綱島の工場にビルゲイツも来ました。回転寿司に招待し大変喜んでくれたようです。その後銀行向けのファームバンキング端末も担当しました。また、ヤマト運輸様をはじめとする宅配運輸十数社に向け荷物情報を読むハンディーターミナルとプリンタのシステムも製作しました。通信工業お得意の携帯電話のパケット機能を利用しドライバーの持つ荷物の情報を業界初でリアルタイムに本社のサーバーまで送信しシェアを拡げました。また2万円未満の端末も開発し、メール便創出の足がかりにもなりました。非接触カードの読取装置も手がけ交通系流通系のリーダライタは今でも高いシェアを持っています。最近の宅配大手のセールスドライバー端末には非接触カード読取機能を持ち決済がその場で出来るものが使われています。私が目指したのはフロントエンドですべての営業行為が終了できるシステムでした。この手の商売は端末だけの比較ではなく、システム全体の機能でお客様にどれほどのメリットがあるかをプレゼンテーションし他社に競り勝って初めて受注できます。いわゆるB2B2Cのビジネスで

相手先企業との太い結びつきが重要な事業です。このように綱島では、およそ大阪の本社とは趣が異なる特機商品を開発し続けました。

さて今の仕事です。パナソニック・スピンアップ・ファンド推進室で社内ベンチャーのインキュベーションを担当しています。

パナソニック・スピンアップ・ファンド制度概要

2001年、当時の構造改革の中で社員の主体性・創造性を活かし、パナソニックの新規事業創造を行うことを目的として設立。ファンド総額150億、今までに650の応募があり30社設立、現在10社運営中。連結販売高45億（2012年度見込）、4期連続黒字増収増益見通し。社員総数約150名内出向社員約30名

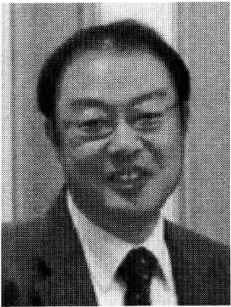
代表的な会社説明

- ピーディーシー：デジタルサイネージの提供
- SMAC：各種インバータの開発設計販売
- EST：スターリングエンジンの開発販売
- SIM24：e-Workを活用した主婦の技術者陣による強度・温度解析サービスを提供
- PUX：ゲーム機、携帯、スマホ向けエンベデッド画像・音声認識エンジン、楽曲オーサリングツール等の販売

各会社社長は大会社の重い殻を脱ぎ本社がタッチしていない市場を見つけ、自身の裁量で開発から販売保守まで手がけ自由に経営しています。5年で累損解消のルールはありますが、利益は自社の蓄えとして残されます。黒字は至極の喜びです。小さな会社の成長を間近に見るとまだまだ日本の電機業界はやれることがいっぱいあると感じます。過去を捨て、この新時代で生まれ変わり、業界を立て直したいものです。

『システム』から学ぶこと

菊池紀幸（昭和61年電子卒）



大学卒業後、会社に入社して、『システム』に関する業務に携わっており、そこから学ぶところについて、書きたいと思います。

大学卒業当時、『システム』というのは、皆さんがご理解されている「装置個々の要素が相互に影響しあいながら、全体として機能するまとまりや仕組み」という意味で、電気や通信、情報処理などの工学技術で物事が説明できました。当時は、“機能の実現”が中心で、非常に難しく大きなものという印象だったように記憶しております。

しかし、技術の革新によるコンピュータやネットワークの爆発的な普及により、『システム』という言葉も普通に耳にするようになりました。最近では、装置で実現するシステムを意味するものではなく、仕組みや制度、体系など無形物に対しても『システム』という言葉を使っています。それだけ、『システム』という言葉も一般化しており、普通に使われる言葉になりました。（念のため、ここで記している『システム』とは装置で実現するシステムを示しています。）

また、一般には、『システム』という言葉に、楽が出来る、きれいになる、効率がよくなる、お金がかからなくなる、などのイメージを持っているようです。このためか、『システム』に対し、大学卒業当時の“機能の実現”という役目から、現在では、もっと広範囲に効率的な業務プロセス・処理プロセスの実現の役目を期待されるようになりました。

そのような環境の中、我々システム技術者は、工学技術はもちろんのこと、効率的な業務プロ

セス・処理プロセスを実現するため、他業種や他分野、その会社などの業務の流れや特性、風習、掟などを熟知しなければいけません（“業務ノウハウ”といいます）。

私が携わってきたシステムは、業務処理システムが多いのですが、クライアントからシステム化の目的やどこを効率化したいのか、何を実現したいのかをヒアリングする中で、業界用語や業務の流れなど、まったく異なった世界を実感します。そのような違う世界をシステム化するのですから、非常に大変です。まずは、クライアントの業務の流れや特性、風習、掟などを知ることから始めなければなりません（一般には、“業務分析”といっています）。そこから、クライアントの目的にあったシステム化を検討する中で工学技術を持ち込み、システム構築を行います。

構築したシステムがその目的に沿ったものであれば、業務の効率化も進み非常に使い勝手のいいものになります。しかし、きちんとできていなければ、そのシステムに人々が振り回され、業務の不効率化やしいては人員増強を余儀なくされる最悪な状態になってしまいます。

システム技術者は、最新のしっかりした工学技術はもちろんのこと、さまざまな業種や分野の業務ノウハウが必要で、勉強の毎日です。その反面、違う業種や分野という違う世界を見ることができ、非常に面白く、勉強にもなります。自分の中では当たり前であることが、他では当たり前ではないということを気付かせられたりもします。

システムをきっかけに、いろいろなことを学ばせてくれます。これからも、公私共に、未経験や未体験のさまざまな世界を覗いてみて、自分磨きに励んでいきたいと思っております。

佐藤利三郎先生を偲んで

磊落寛容な大先輩

太田原 功（昭和 30 年電気卒）

当時東北大学工学部助教授であった佐藤利三郎先生のご指導で研究生活に入ってしばらく後に、研究成果発表の指示があり、作成した A4 版一枚の原稿は朱筆で埋め尽くされていました。修正に修正を重ねて先生の了解が得られ、昭和 36 年度電気関係学会東北支部連合大会が最初の研究発表の場でした。研究生活とは言いながら、当時岩手大学における研究実験設備は皆無でしたので、春夏冬の休講期間に東北大学に足繁くお邪魔しての短期滞在、1 年間の内地留学等先生のご指導を直接受けると共に佐藤研究室の設備を大いに利用させて頂きました。研究室には学部学生、大学院生の他、他大学や会社等から常に数人の方々が滞在して先生の指導を受けておられました。多様な研究者が出入りする研究室環境の中で、多くの方々と公私両面にわたって交流させて頂きました。お蔭様で学会誌論文を含めた公表論文 30 余編を基本として、昭和 47 年 12 月東北大学から工学博士の学位記を頂くことが出来ました。先生の指導方針は常に、「実践、実験せよ!」、「研究成果を公表せよ」でした。2012 年度ノーベル医学生理学賞受賞者山中教授が「ゴチャゴチャ考えておらずに実験しろ!」と研究者を叱咤激励しておられるとの言葉が報道されておりますが、佐藤先生の指導方針そのものでした。

若干の特許も取得し、その成果を活用したいと言う会社から、マイクロ波送受信装置 (3MHz ~ 1GHz) 一式等の寄贈があり、岩手大学内での研究推進体制がある程度整い、仙台まで頻繁には出向かなくとも良くなりました。上記研究設備寄贈の他、佐藤先生のご配慮で関連企業からささやかながら研究費支援を引続いて頂いたお蔭で、曲りなりにも停年退官まで研究生活を続けることが出来ました。大学内企業さえ存在する法人化後の大学は正に欧米化した大学の姿であり、そのあり方には疑問を抱きますが、佐藤先生が現今の大学社会で活躍しておられたならばどのように対処されただろうかと興味深く推量しております。

先生は全く気取らない磊落寛容なお人柄でした。多方面にわたる方々から信頼され、競争関係にあると思われる会社の方々にさえ、入れ替わり先生の部屋を訪問して指導を受けておられました。

飲めば学部学生や院生への洒落なお説教と黒田節、そして余暇を見付けてはゴルフでした。東京における或る会食の席で、「お前ゴルフを始めなさい!」との命令が下されました。ゴルフの「ゴ」の字も知らない私でしたが、翌日都内のデパートでご指示通りのハーフセットなるものを買って求めました。その後、先生が岩手大学においでになる度に盛岡周辺のコースに同伴させて頂き、160 度圏内の人払いをしての危険ショットの繰り返しでしたがゴルフに関しては苦言も指導も一切ありませんでした。「ゴルフで気分転換を図りながら研究活動に精励せよ!」との先生の親心だったろうと思います。ゴルフ歴 50 年近く経ち、160 度圏内こそ狭まりましたが「百獣 (110) の王」の座は揺るぎません。

母校岩手大学を愛する先生のお姿の一つとして、後輩学生への出張講義は岩手大学設立以来、お亡くなりなる直前まで 60 年近く続きました。また、先生が盛岡工専学生時代にご指導頂いた故草刈遜先生への敬慕の念は深く、「草刈先生ご生誕 100 年記念」行事を科会が行った際には、先生の胸像を自前で寄贈して下さいました。佐藤先生の思いのこもった胸像が 2003 年 6 月工学部玄関ホールに安置され、後輩の姿を日夜見守っておられます (会誌「きたかみ」50 号、記念特集号参照)。

佐藤先生の学術面における業績は割愛しますが、多方面にわたる知識と気配りに敬慕の念を禁じ得ませんでした。ご指導頂いた研究の中心課題「ネットワークの整合」の中から会得した「整合の技術と人間」との深い関連性を私の処世訓としております。

長い間のご指導ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

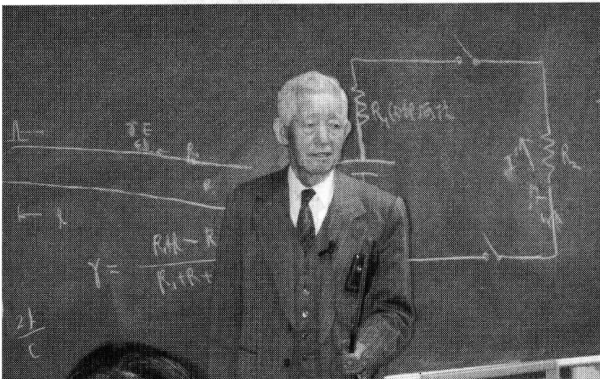
電気から学ぶ先生に感銘

久保田 賢 二 (昭和 42 年電気卒)

「佐藤先生がお亡くなりになった」との報せを受けたのは翌日午前 10 時頃でした。あの東日本大震災のときには、ご無事でお元気と聞いて安堵していたのに…。僅か 1 ヶ月後に亡くなられるとは、思いもしませんでした。

思い起こせば恩師太田原功先生に、佐藤先生主催の通信用変成器研究会で卒業研究の内容を発表するようと言われて奉職数ヵ月後の昭和 42 年夏頃、連れて行かれて報告した時が佐藤先生にお目にかかった初めてでした。そして平成 22 年 10 月 2 日、ホテルメトロポリタン仙台で行われた“利三郎塾の会”でお目にかかったのが最後となってしまいました。会では「東北における産学官連携—21 世紀の東北を考える懇談会の軌跡—」と題するご講義、終盤ではオハコの“黒田節”をご披露下さり、蛮声張り上げての門下生一同の大合唱“正調 利三郎節”の時はにこにこして聴いておられました。

昭和 49 年 5 月から 6 ヶ月間、私費内地研究員として先生の研究室に出入りを許され、“近傍電磁界による遠方電磁界の推定”のテーマを戴きました。電磁界理論など勉強したことがあるとは言えなかった私はオロオロするのみでしたが、まずは近傍の電界と磁界の測定という先生のお言葉に従って、測定の基本だけはこの思いでプローブとバランの実験をし、DC 院生に理論の初歩の手ほどきを受けた次第でした。あっという間に時が過ぎて、岩手大学帰任に必



「電気から学ぶ」のご講義 H16.10.15

要な書類を戴きに、意を決して教授室を訪れた時に「理論が難しくてわからない」と泣き言を言ったところ、あの多忙を極めておられた先生が他の面会者をシャットアウトして、1 時間近くの間懇々と諭して下さいました。

数年後ダイポールアンテナ近傍の電界と磁界の測定値から遠方電磁界を推定することができましたが、当時の私にはそれ以上のことはできず、断念のお願いをした次第でした。先生がいつも仰っておられた“アンテナのどこから電波は出るのか？”また最後まで精力を傾けられた EMC、EMI の問題に通じる重要な研究テーマであることは当時気がつきませんでした。

先生は国産初の TV 放送アンテナ (昭和 30 年頃北海道手稲山、スーパー・ターンスタイル・アンテナ 8 段) の設計をなされ、以降東京タワーのスキューアンテナなど数々の放送アンテナを世に送り出されました。東北学院大学工学部長に就任されて間もなく、多賀城キャンパスに大型回転台を設置して大型鉄塔用の多面合成アンテナの研究を始められ、私もお手伝いをさせて頂きました。東北学院大学と岩手大学の教職員、院生並びに学生の協力により得られた成果は、東京タワーの東京 MX - TV、地上デジタル TV 放送アンテナの実現に活かされました。関東圏の TV 放送送信所は東京スカイツリーに移行しますが、先生がアンテナ委員会委員長として長い間見守ってきた東京タワーは、昨年 12 月 14 日に文化審議会から登録有形文化財として保存するようにと答申されました。計画通り頂部のスーパー・ターンスタイル・アンテナは更新され FM 送信アンテナになり、先生の愛でられた曲線美の東京タワーは外観を大きく変えることなく、永く後世に引き継がれます。

先生は母校岩手大学を大事にして下さり、ご多忙を極める中、盛岡まで毎年講義にお出で下さいました。平成 13 年～19 年の「電気から学ぶ」と題するご講義を毎年拝聴し、感銘深く記憶しております。恩顧にお応えできなかった不肖の弟子の私ですが、先生のお教えを糧に生きていきます。どうぞ安らかにお眠り下さい。

高木三郎元会長を偲んで

追 悼 文

辻 野 哲 司 (元岩手大学教育学部技術科)

高木先生に初めてお会いしたのは、私が技術科に採用された昭和45年で、それから先生が退職されるまでの18年間、多くの面でご指導・ご教示を賜りました。

退職後も、時々私の部屋に立ち寄って下さり、お茶を飲みながら色々話をして行かれ、80歳を過ぎて、颯爽としたお元気なお姿に敬服しておりました。

そのような中、昨年2月、先生が急逝されたとの訃報に接した時は、一瞬言葉を失ったことを覚えています。

先生は昭和17年盛岡高等工業学校電気科(現岩手大学工学部電気電子・情報システム工学科)をご卒業され、兵役、民間会社を経て、昭和23年から弘前工業高校職員として勤務されました。

昭和28年には岩手大学工学部鉱山科(現社会環境工学科)に助手として着任され、移動磁界型砂鉄選鉱機の開発研究に従事されました。

昭和34年、同大学芸学部(現教育学部)に転出され、技術科に所属されました。その後、講師、助教授、教授に昇任され、同63年停年退職されるまでの40年間の長きに渡って(工業高校も含め)、研究と教育に専念され、多くの技術科教員を世に送ってこられました。その方々は、いまや岩手県のみならず、日本各地の教育界で指導的立場になり、活躍されております。

先生が学芸学部へ移られる前年の昭和33年、文部省(現文部科学省)は、中学校指導要領の改訂を行い、それまでの教科「職業・家庭科」に代わって、「技術・家庭科(技術は男子用、家庭は女子用)」を新設し、昭和37年からの完全実施を決定しました。技術(男子用)の指導内容は、設計・製図、機械、電気、木工、金工、栽培の6領域で構成されており、教員も新免許「技術」を有することを求められました。それを受けて、岩手大学学芸学部では、この免許を取得できるようなカリキュラムを組むために、職業科と工作科を統合再編し、電気、機械・金工、木工、栽培、技術科教育法の5分野からなる技術科を設立しました。

このような背景のもとに、昭和34年、先生は工学部から学芸学部へ転出され、技術科に所属して、電気分野を担当されたのです。

一方、日本の中学校では、新設の「技術(男子用)」を担当する教員の確保が急務となり、文部省は国内各学芸学部に対し、この教科に関する講義・実習講習会の開催を要請し、職業の免許を持つ教員を受講させて、技術の2級免許を与えるという便法が取られました。

先生は、昭和34年着任時より37年までの4年間、県内各地で行われた講習会での電気担当講師として奮闘され、岩手県技術科教員の育成と指導に当たられました。その後も、中学生によく分かるような教材開発に積極的に取り組み、中でも太陽光発電、リニアモーターカー、回転磁界、光ファイバーによる通信に関するものは、傑作と言われております。

このように、岩手県技術科教育(男子用)の基礎づくりにご尽力された貢献は誠に大きく、筆舌に尽くせないものがあります。

一方、先生のライフワークは接地抵抗に関する研究で、一連の業績は高く評価されております。

先生は物事の洞察と判断において、伶俐であられながら、いつも笑顔で人に接し、廉直で人間味豊かな、そして温厚篤実な方でした。

このようなお人柄を有する先生を尊敬し、人生の師として、多くのご指導・ご教示を賜った先生に、衷心より感謝申し上げます。

高木先生、どうぞ安らかにねむりください。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



研究室での高木三郎先生
(昭和62年2月)

佐藤源美元会長を偲んで

佐藤さんへの追憶

阿 部 長 一 (昭和19年専門卒)
(昭和31年電気卒)

鳥崎藤村の詩に「時は暮れゆく春よりぞ、また短かきはなかるらん、恨みは友の別れより、更に長きはなかるらん」という一節がありますが、佐藤さんの訃報に接し、この句がサッと頭をよぎりました。先輩との別れは筆舌に尽くすことの出来ない、悲しい別れでした。

佐藤さんが国鉄に入られた、三戸町時代から始まり、第二の職場に勤める五十有余年、官舎生活その他で数多くの、薫陶を受けました。私が今現在あるのは正に佐藤さんのお蔭です。

軍隊で将校さんだった、佐藤さんの数々の言葉の中で、心に残っているものの一つに「拙速を貴ぶ」ということがあり、遅くて立派なことは誰でもできる、早くできなければならないという、軍人らしい言葉です。

この他にも思い出は数限りなくありました。二人で秋田県まで米の買出しに行った時など、私は父の半ズボンを、佐藤さんは父の長いズボンを持って行き、米と取りかえてきましたが、佐藤さんの方が、2倍のお米だったこと、帰りはお巡りさんに見つからないように、気配りして来たことなど。

佐藤さんが青森信通区長で、私が管理局の係長の時代はよく二人で、部長随行で歩いたものです。その都度都度に先輩から、笑いながらご注意を頂き、国鉄を無事に送ることができました。思い出を述べれば数限りありません。

職場を去り、悠々自適のくらしをしていると

きにも、度々お邪魔しましたが、趣味に木彫りをしており、これがプロ級で素晴らしく、能面も数多く彫られ、私もその作品のこおもて小面を頂いて、玄関に飾っております。これも先輩を偲ぶ、よすがとなっています。

五十年の長きに亘るつきあいで、私から見た佐藤さんは、論語の中で子路の述べられている「剛毅木訥仁に近し」という言葉がぴったりで、意志が強く、飾り気がなく口数が少なく、道徳の理想とする仁に近い人でした。

先輩は四月三十日に、亡くなられたとのことですが、西行さんの歌に「願わくば花のもとにて春死なん……」というのがありますが、万朶の桜の美しく咲いている最中に旅立ったことは、先輩の人生に対しての天の賜と思います。

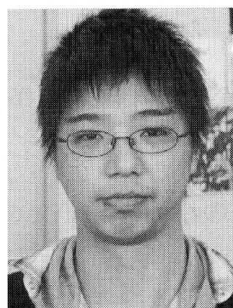
数限りないご恩をうけましたが、紙面をお借りして御礼申し上げます。



佐藤源美元会長
(平成8年 岩手高齢者大学盛岡校入学式にて)

第9回（平成23年度）草刈賞受賞者

電気電子工学科 大河内 駿太郎



草刈賞を受賞してはや一年が経とうとしています。自分の活動でこのような賞をいただくことができ大変感激しました。

私は学部時代天文部に所属し、3年生の時には部長を任される事になりました。部長としての仕事は自分が思っていたよりもずっと大変で失敗することもありましたが、部員やOBの方々の助力もあり、「星を観る会」という地域の方々を呼んで星を見せたり星座の話をする場で自作のプラネタリウムを参加者の皆さんに見せることができました。

また、研究室に入ってから学内カンパニーの1つ「Anonas Lighting」に所属し、LEDを用いたインテリア照明の作製も行ってきまし

た。今では被災者支援団体と提携し、あわびの貝殻を用いた照明「あわび蛍」を作り、販売に向けた活動を行なっています。

これらの経験から、責任感や外部との関わり、仲間との協力の大切さを学ぶことができました。

現在、私は本大学の大学院に進学し、研究と勉学に励む毎日を送っています。院生になってからの授業は今までよりも難しいですが、非常に興味深く自分の知識を深めるまたとない機会になっています。研究は少し難航していますが、徐々に良い結果が出ているため、今後は学会などで発表を行ないたいと思っています。残り1年間の学生生活ですので、より一層研究活動に励みつつ有意義で充実した生活を送っていきたいです。

電気電子工学科 多田 静香



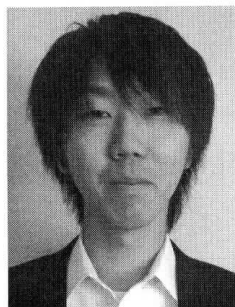
平成23年度の草刈賞を受賞し、4年間の大学生活がこのような形で評価していただいたことを大変光栄に感じています。

大学入学当初から様々なことに取り組んで参りましたが、特に思い出深いのは工学GIRLSの一員として様々な活動をさせていただいたことです。例えば、オープンキャンパスで女子高校生向けの相談室を催し、大学生活における素朴な疑問や大学受験における不安の相談を、自らの体験や様々な人の体験談を挙げながら解消してきました。また、「工学ガールズ」という冊子を作成し、従来とは違う形で工学部を女子高生や大学生に紹介することや、女子学生が生活しやすい環境を整える活動を行って参りました。

また、大学4年間ボランティアサークルに所属いたしまして、市内の児童センターで人形劇の講演をするなどの活動を行ってきました。部長を務めさせていただいた時期には、色々な事に取り組み、自分自身が成長する機会をたくさんいただけたことに、とても感謝しております。

現在は、岩手大学大学院に進学し、研究や勉学に勤しみつつ、工学GIRLSやボランティアサークルの活動を継続して行っております。まだまだ未熟者の私ですが、日々勉強し、少しずつではありますが成長して研究で成果を挙げ、母校と研究室の発展の力になればと思っています。

最後になりましたが、草刈賞受賞にあたり、今までお世話になった先生方、両親、友人に感謝し、これからも研究に励んでいきたいと思えます。



岩手大学の卒業と、草刈賞を受賞してから1年が経ちます。伝統の草刈賞を頂くことができ、光栄に思っています。

私の受賞理由は、情報システム工学科の学生と他大学の情報系学部の学生との交流会を開いたことでした。交流会の目的は、ふたつありました。ひとつは、他大学の研究や生活について情報交換をして、研究活動の良い刺激にすることです。もうひとつは、大学間の壁を無くして普段から交流できるようにすることです。結果として、どちらの目的も達成出来たと感じています。特に交流会の連絡ツールとしてSNSを使用することで、個人同士が気軽

にコミュニケーションを取れるようになったのは良かった点です。今思うと、他人を巻き込んで新しいことをしたという経験はとても貴重に思います。それまでは積極的なタイプではない私でしたが、自分を変えることができる経験になったと実感しているからです。

現在は東京のIT企業に就職してSEとして働いています。私も他大学の代表だった人も社会人として東京に移ってしまいました。しかし、他の学生が今でも定期的に交流会を開いているのは嬉しいことです。今まで関わりを持っていなかった人達と関わりを持つということは、色々な面にとってプラスになります。岩手大学の後輩達にも積極的にそのような機会を持って貰いたいです。

《草刈賞の由来》

盛岡高等工業学校電気科ならびに盛岡工業専門学校電気科卒業生（全10回の卒業生）、岩手大学工学部電気工学科、同電子工学科において、草刈先生の教えを受けた昭和45年3月までの卒業生、並びに岩手大学工学部電気工学科、電子工学科教職員としてご薫陶頂いた教職員、以上の有志約90名が相はかり、「草刈先生ご生誕100年記念事業実行委員会」を組織して上記の卒業生と教職員約1000名に呼びかけて募金活動を行い、成就した事業の一つである。

《草刈賞の趣旨》

草刈先生は旧電気工学科を中心として、岩手大学の基礎を築かれた方である。先生のご業績を称え、後世にその教えを伝えるために、電気電子工学科ならびに、情報システム工学科卒業生の中から、意欲的な学生生活を送り後輩の模範となる学生に草刈賞を授与することによって、学部学生の向学心を啓発することを旨とする。



草刈メダルと賞状

追悼

小笠原拓君を偲んで



一昨年の大震災は私たちにとって忘れられないものとなりました。三陸沿岸各所において甚大な被害が出ました。小笠原君もまた津波の犠牲になってしまったことを、改めて残念に思います。

縁あって私と小笠原君は、同じ釜石高校卓球部に所属していました。高校時代の小笠原君は誠実な人柄で誰からも好かれる好青年であり、勉強や部活動など何事にも真剣に取り組んでいました。そんな彼の姿勢を尊敬していました。震災があった日の前々日、私と小笠原君は地元の卓球クラブの練習に参加しました。小笠原君と卓球したのは高校以来のことだったので、時間を忘れて打ち合ったことが、印象に残っています。何の変哲もない、高校時代と変わらない卓球の練習が最後となってしまったことは今でも信じられません。

小笠原君は非常に努力家であり高校、大学を通じて成績はとても優秀でした。高校時代によく勉強を教えてもらっていたのも良い思い出で

す。努力家の小笠原君自身が積み上げてきた努力が花開く前の、20歳という若さで亡くなってしまったことはたいへん悔やまれます。

私の地元釜石は、今まで数多くの困難に直面してきました。明治三陸大津波での被害、第二次世界大戦では製鉄所を狙った米英軍による二度の艦砲射撃により、町が壊滅的な状態になってしまったこともありました。

しかし、町を再建し、度重なる試練を乗り越えてきたという歴史があります。今回の大震災は町だけでなく人々の心に大きな傷を残してしまいました。それに負けることなく岩手が力強く復興できると信じています。

小笠原君を始めとした、震災で亡くなられた方々のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

(加藤昭紀：同期生)



写真1 高校時代の小笠原君（上段左から3番目）



写真2 2度の艦砲射撃によって焼け野原となった釜石市街地

私が拓君の死を知ったのは、東日本大震災が起きてから2週間後のことでした。震災が起きた当初、何度も連絡を試みてはいましたが、繋がらず心配していた矢先のことでした。知らせを聞いたときは実感が持てず、とても信じる気になれませんでした。今となって悔やまれるのは、彼と1枚も写真を撮ったことが無かったことです。いつも一緒に行動していながら、写真を撮ったことがありませんでした。写真なんていつでも撮れるだろうと思っていたのもあったからかもしれません。まさかこんなことになるとは思ってもみませんでした。あの時のことを思い出すと、今でも深い悲しみに襲われます。

彼とは大学で初めて知り合い、講義の際には常に行動をともにする仲でした。真面目だった彼は頭も良く、勉学の面では教えてもらうことも多かったです。解らない問題について質問すると、私が理解できるまで丁寧に教えてくれました。試験前に限らず、昼休みでも図書館へ行き、勉強をしていた彼は私に大学生とは本来こうあるべきなのだろうと感じさせてくれました。もともと高校では特筆するほど成績が良かったわけではなかったと聞きましたが、大学では学科で一二を争うほどの成績でした。この事からも彼が努力家であったことがわかると思います。彼の勉強に対する姿勢は誰もが認めるところでした。彼は私にとって目標とする人であり、尊敬していました。普段はあまり自分から話す方ではありませんでしたが、物腰の柔らかい人でいつも私の話を笑って聞いていてくれるひとでした。

拓君の死を受けて、今私が生きている今日は、自分だけのものではないと強く感じるようになりました。目標であった彼はもういませんが、一生越えられない存在として今も私のなかで生き続けています。真面目で心優しく、努力家だった彼に少しでも近づけるように努力していきたいと思います。そして、彼の死をしっかりと受け止め、強く生きていきたいです。

(高野光平：同期生)

小笠原拓君とは、クラス担任として、また授業を通して、2年間接してきました。私の授業のときは、教卓から見て正面右側の一番前に座っていて、この追悼文の執筆をお願いした学生さんたちと一っしょに、熱心に授業を受けていたように記憶しています。授業中、クラス全員に対して質問すると、よく答えてくれていたのが小笠原君でした。前向きで、学生生活をいきいきと楽しんでいる様子が伝わってくるような学生さんでした。今回の被災が残念でなりません。地震発生の3/11は、講義も終わっておりました。拓君が春休みで帰省していた際の出来事でした。歴史に「もし」は禁句なのでしょうけど、地震が1ヶ月ほど前後にずれていればと、つい思ってしまいます。彼の、いきいきと学生生活を謳歌していた頃の姿を偲びつつ、拓君のご冥福を、心よりお祈りいたします。

(高木浩一：担任)

平成 24 年度東京支部報告

東京支部長 澤 藤 隆 一（昭和 47 年電気卒）



2011.3.11 の東日本大震災からの復興を急ぐべき 2012 年でありましたが、世界各国の指導者交替に当りナショナリズムが前面に出て、特に中韓との摩擦が経済面に波及、更にデフレ

による円高継続が日本製造業に決定的なダメージを与え、工場がドンドン東南アジアに逃げ出して行きました。特に我々電気電子情報関係にあつては、インフラ関係の重電はともかく、エレクトロニクスや半導体、そしてかつては考えられなかった電力会社までもが厳しい局面に追い込まれています。

岩手大学は津波で壊滅的被害を受けた水産復興のために三陸復興推進本部を設置、『岩手の復興と再生に』オール岩大パワーを、のスローガンのもと、釜石にサテライトを設置し、久慈と宮古にエクステンションセンターを設置して復興推進活動を積極的に行っています。同窓会としても、岩手大学とともに、三陸復興に手を携えて行かなければなりません。きたかみ会では「学び地応援隊」を組織し、岩手大学の「三陸復興推進機構」「地域防災研究センター」「学務部キャリア支援課」と連携して活動しています。更に同窓会連合傘下の各組織でも同様の活動を行っていかうと呼び掛けて行く方針とのことです。

当初多くのボランティアが訪れた三陸沿岸市町村も、その後話題に上ることも少なくなり、忘れられて行くのではないかという危機感が現地から伝えられました。私も在京盛岡広域産業人会長として、そんな沿岸市町村を忘れることなく、現状を知り、そして応援することをテーマとして 11 月 10、11 日に現地視察会を企画しました。一祐会の東京各支部会員に呼び掛けた結果、電気電子情報科会東京支部 3 名、東機会

2 名、きたかみ会 1 名、その他会員を含めて 30 数名のツアーとなり、沿岸各地で現地の方と交流し、買い物をしてお金を落として参りました。現地の声は異口同音に「こうして来て頂けるだけでも有難い」というものでした。山本宮古市長にもお会いし、岩手大学釜石サテライトも訪問して激励しました。宮古市田老、大槌町、陸前高田の惨状には息を呑みました。釜石や大船渡は復興に向けての息吹を感じ、被災しない地域を多く抱えるところは住民の助け合いによって復興の活力があるが、地域全体が被災したところはどこから手を付けたら良いか、ましてや地盤沈下をどうするかなどで茫然自失という有様でした。参加者は、この眼で見た現状に、TV 画像などからは伝わりきれないモノを実感したとの感想でした。復興には長い年月がかかることを感じ、息の長い支援を心に誓った旅でした。結果はホームページで報告しております。

私が管理するホームページでは、一祐会傘下の東京地区の各支部の総会の模様や、岩手大学が首都圏で催すイベント、岩手県、盛岡広域 8 市町村のイベント等を紹介し、会員への情報提供に努めています。IUEEITOKYO で検索下さい。ただ、ホームページはパッシブな媒体ですからイベント情報をメルマガ形式で発信し、ホームページへ誘うように努めました。「またか」とウンザリしている会員もいるのでは (^_^)

2012 年のビッグイベントは 6 月 30 日(土)の「卒業生・修了生と学長との懇談会」(アルカディア市ヶ谷当支部 20 名参加)、9 月 16 日(日)の一祐会 70 周年祝賀会 (ホテルメトロポリタン盛岡ニューウィング：当支部 7 名参加)、10 月 27 日(土)の東京支部大会 (44 名参加) でした。2013 年は電気電子情報関係に再び明るさを取り戻す年にしなければなりません。頑張りましょう！

《支部だより》

平成 24 年度仙台支部報告

仙台支部長 佐々木 良 治 (昭和 43 年電気卒)

仙台支部総会は、平成 24 年 6 月 23 日(土) 15 時から「ハーネル仙台」において、会員 25 名の出席で行われました。

総会は、千葉副支部長の司会のもと、佐々木支部長の挨拶に続き、ご来賓の柏葉会長、岡電気電子工学コース教授のご祝辞をいただきました。議事に入り、平成 23 年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成 24 年度事業計画・予算および役員改選について審議され、これらが原案どおり承認されました。平成 24 年度の支部役員は以下のとおりです。(敬称略)

支 部 長 佐々木 良 治 (S43 電気)

副支部長 千 葉 浩 克 (S40 電気)

副支部長 数 藤 崇 (S52 電気)

監 事 横 井 哲 夫 (S43 電気)

監 事 金 田 博 臣 (S45 電気)

総会に引続き、会員講演は佐々木義明氏(元石巻ガス(株)常務取締役、S46 電気)より、「東日本大震災三陸石巻」と題して、震災時のガス会社屋上からの秒きざみで変化する大津波の映像などを報告していただきました。テレビで断片的に見ている映像と異なり、自分自身が遭遇

したような生々し感、恐ろしさを通り越して人間の自然に対する無知・無力感を強く感じました。

懇親会は、数藤副支部長の司会で、まず岩手大学学生歌を斉唱し、最年長阿部相談役の乾杯の発声で行われました。懇談では、お互いの無事を確かめ合い、震災後の復旧状況の情報交換、津波の恐ろしさ、防災グッズなどやはり大震災のことに話題が集中しました。

最後には例年通り全員で輪になって肩をくみながら同胞寮歌を唱和し、一年後の再開を約束しました。

その他、役員会以外の平成 24 年度会員活性化事業の開催状況は以下のとおりです。

平成 24 年 1 月 21 日(土) 新年会

平成 24 年 4 月 21 日(土) 第 4 回長寿者を祝う会・お花見

平成 24 年 10 月 13 日(土) 会員卓話

「仙台市地下鉄東西線工事の進捗状況について」

田代良二会員 (S55 電気)



平成24年度 岩手大学電気電子情報科会 仙台支部総会

平成24年 6 月 23 日 ハーネル仙台

平成 24 年度盛岡支部報告

盛岡支部長 旗 福 寛 (昭和 38 年電気卒)

盛岡支部主催新年会報告

日時：平成 25 年 1 月 28 日 午後 3 時より

(午後 1 時からの本部役員会終了後)

会場：労働福祉会館 (盛岡市大沢川原 2-2-32)

参加者：23 名 (内 大学院生 (普通会員) 2 名)

新年会は、まず柏葉会長から新年の挨拶に続いて昨年 3 月定年退職された情報の渡邊孝志先生の紹介がなされました。続いて修士 2 年の滝田耕平君より渡邊先生に花束が贈呈されました。ここで渡邊孝志先生からご挨拶をいただき、昭和 55 年 4 月赴任することになった岩手大学との不思議な縁のお話や最初日立製作所で半導体の仕事を始めてから岩手大学での人工衛星の画像処理など 40 年間の研究内容の変遷などのお話をいただきました。

乾杯は専門電気 24 年卒の山崎時男さん、スピーチでは東京支部の澤藤支部長から岩手、盛岡の産業人会についての近況、さらに今回初参加の寺沢昭彦さん (電子 53 年卒、院 55 年卒、盛岡セイコー) と村田崇さん (電気平成 2 年卒、岩手日報社) から仕事内容や会社の状況につい

てお話がありました。

大方のスピーチが終わったところで、電気 29 年卒、科会相談役の佐々木喜八郎さんより最近旅行されたタイ国の首都バンコクから北へ 300 km の古都で、世界遺産であるスコタイ遺跡で演じられる灯籠流しや周辺に暮らす部族の衣装を着けての美人パレードや演劇のパレードなどのビデオを鑑賞しました。スコタイは 13 世紀タイ族による最初の王朝国家ということです。このお祭りは京都でいえば平安神宮の時代祭、盛岡でいえばさんさ踊りの夏祭りとお盆の船っこ流しに相当する祭りのように思いました。

祭が終わってからも佐々木さんは楽屋に潜入し舞台裏での一般市民による祭りの準備や手伝いの様子をビデオに撮っておられます。これぞ演劇凝性^{ウツクシ}の佐々木さんの本領発揮といったところで、美人パレードと演劇の舞台裏まで覗き見るのがタイ旅行の目的のようでした。

中締めは情報 56 年卒の鳥谷部副会長が務めました。午後 5 時 30 分終了



新年会の様子

平成 24 年度電気電子情報科会総会

平成 24 年度総会は、平成 24 年 6 月 16 日(土)に盛岡市大沢川原の岩手労働福祉会館において開催されました。

情報平成 3 年卒の木村彰男理事の司会で始まり、柏葉会長の挨拶では、震災後に科会 70 周年記念式典をどうするか苦慮したこと、開催した方が会員の活力になると思ったこと、先輩の皆さまに草刈功労賞を贈ることができたこと、祝賀会では東京支部の皆さまに大変ご苦労をおかけし、大成功だったことなどが話されました。

会長挨拶に続き、電気電子・情報システム工学科長西山清教授にご祝辞を頂戴しました。

議長は 電気 40 年卒の佐藤匡氏、書記に情報 61 年卒立花龍一理事と電院平成 20 年了阿部貴美氏が選任され、ほぼ原案どおり可決、承認されました。

役員改選では、田山典男氏(電気 41 年卒)、歳弘健氏(電気 33 年卒)が理事を退任、新しく吉田英夫氏(電気 41 年卒)、久保田賢二氏

(電気 42 年卒)が理事に就かれました。また、会計監査だった久保田氏の後任に大坊真洋氏(電院平成 11 年了)が就任されました。幹事は東京支部が全員改選、仙台支部では一人が変わりました。

その他で、科会 70 周年祝賀会に一方ならぬご尽力をいただいた東京支部の祝賀会実行委員会に感謝の意を表することが決まり、実行委員長寺井氏(電気 41 年卒)に感謝状が贈られました。

総会特別講演は、その寺井氏を講師に「創立 70 周年祝賀会を終えて」と題し、その顛末を話していただき、科会への提言もいただきました。

その後の懇親会は、千葉副会長の進行により、和やかに楽しく進められました。

長い間科会事務局として、また理事・盛岡支部長として科会を支えて下さった歳弘氏に会長から花束が贈られました。



平成24年度 岩手大学電気電子情報科会総会

平成24年6月16日 盛岡 岩手労働福祉会館

平成 24 年度岩手大学電気電子情報科会総会議事録

日時：平成 24 年 6 月 16 日（土）

15：00～15：45

場所：岩手労働福祉会館

議長：佐藤 匡（電気 S40）

書記：立花 龍一（理事、情 S61）

阿部 貴美（電院 H20）

・第 1 号議案、第 2 号議案

事務局より平成 23 年度事業（きたかみ 58 号（創立 70 周年記念特集号）発行、正会員歓迎会、草刈賞委員会活動、会費検討委員会活動、電気電子情報科会 70 周年記念事業）についての概要報告があった。特に 70 周年記念事業は、東京支部の方々の尽力により盛大に行われたことが報告された。関連して平成 23 年度の決算報告が行われた。続いて及川会計監査より監査報告が行われ、異議なく承認された。

・第 3 号議案、第 4 号議案

はじめに、平成 24 年度事業計画について、事務局から以下の説明がなされた。

－きたかみ 59 号発行、正会員歓迎会、草刈賞委員会活動、会費検討委員会活動はこれまで同様に行う予定であること。

引き続き、上記事業計画を勘案した平成 24 年度予算案について報告があった。70 周年記念事業に尽力された東京支部の方々に報いるため、東京支部の振興費を今年度のみ 3 万円増

額することが提案され、他の予算案とともに異議なく承認された。

・第 5 号議案について

平成 24 年度電気電子情報科会の役員案について、事務局から以下の提案がなされ、異議なく承認された。

－歳弘理事が退任され、後任に吉田氏（電気 41 年卒）が就任

－田山理事が退任され、後任に久保田氏（電気 42 年卒）が就任

－久保田氏の理事就任に伴い、会計監査に大坊氏（電情院 H11 年卒）が就任

－東京支部の幹事は 10 人全員が改選

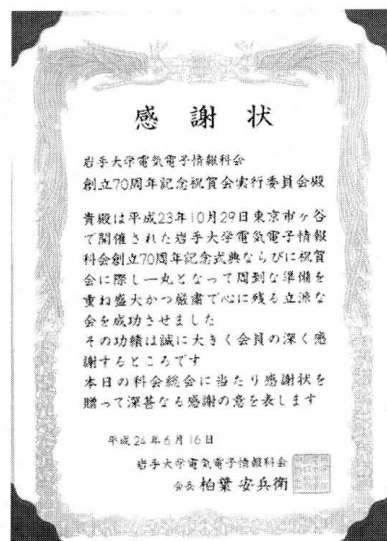
－仙台支部の幹事は 1 人改選。新任は菅原氏

また、佐藤相談役と高木相談役が亡くなられたことが報告された。

・その他

澤藤東京支部長より、「きたかみ会 学び地応援隊」への支援のお願いと、一祐会のホームページに、ホームメール機能をつけてはどうかという提案があった。

最後に会長より、70 周年記念事業で尽力をいただいた 70 周年祝賀会実行委員会に対して感謝状が贈呈された。代表して、実行委員長の寺井正行氏が受け取られた。



感謝状

平成 24 年度電気電子情報科会役員名簿

(平成 25 年 1 月 1 日現在)

役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)	役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)
会 長	柏 葉 安兵衛	S 38 (気 11)	東京支部		
副 会 長	千 葉 則 茂	50 (気 23)	幹 事	四 戸 弘 道	S 37 (気 10)
副 会 長	鳥谷部 達 雄	56 (情 3)	幹 事	松 本 洋 一	40 (気 13)
副 会 長	柳 橋 好 子	45 (子 1)	幹 事	薄 衣 文 雄	41 (気 14)
理 事	小野寺 瑞 穂	29 (気 2)	幹 事	岡 山 茂 久	45 (電 18)
理 事	井 上 隆 志	40 (気 13)	幹 事	田 中 健 二	49 (子 5)
理 事	吉 田 英 夫	41 (気 14)	幹 事	小 磯 巖 男	51 (気 24)
理 事	久保田 賢 二	42 (気 15)	幹 事	畠 山 主	54 (情 1)
理 事	立 花 龍 一	61 (情 8)	幹 事	吉 澤 和 弘	54 (情 1)
理 事・事 務 局	柳 橋 好 子	45 (子 1)	幹 事	畠 山 寧	59 (子 15)
理 事・事 務 局	長 田 洋	62 (気 35)	幹 事	中 山 靖 茂	H 4 (気 40)
理 事・事 務 局	木 村 彰 男	H 3 (情 13)	盛岡支部		
理 事・盛岡支部長	旗 福 寛	38 (気 11)	幹 事	宮 手 敏 雄	44 (気 17)
理 事・東京支部長	澤 藤 隆 一	47 (気 20)	幹 事	岡 英 夫	48 (子院 4)
理 事・仙台支部長	佐々木 良 治	43 (気 16)	幹 事	杉 村 洋 一	49 (子 5)
会 計 監 査	及 川 二千朗	38 (気 11)	幹 事	池 内 達	50 (子 6)
会 計 監 査	大 坊 真 洋	H11(電電情院)	幹 事	佐 藤 信	57 (子 13)
顧 問	佐 藤 淳	特	幹 事	佐 藤 文 昭	59 (子 15)
顧 問	志 田 純 一	特	幹 事	泉 澤 栄	60 (子 16)
顧 問	佐々木 經 夫	特	幹 事	高 橋 康 浩	62 (気 35)
相談役 (元会長)	阿 部 源 祐	16 (専 1)	幹 事	佐々木 正 嗣	62 (子 18)
相談役 (元会長)	岡 田 整 八	18 (専 3)	仙台支部		
相談役 (元会長)	阿 部 長 一	19 (専 4)	幹 事	小 原 四 郎	37 (気 10)
相談役 (元会長)	山 崎 時 男	24 (専 9)	幹 事	菅 原 利 一	55 (気 28)
相談役 (元会長)	太田原 功	30 (気 3)	幹 事	田 代 良 二	55 (気 28)
相談役 (元会長)	佐々木 喜八郎	28 (気 1)	幹 事	佐 藤 雄 一 郎	H 3 (気 39)
			幹 事	柏 葉 安 宏	H 9 (電電 2)

平成 24 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿

平成 25 年 1 月 1 日現在

電気電子工学コース (コース長 長田 洋 教授)			情報システム工学コース (コース長 西山 清 教授)		
分野	職 名	氏 名	分野	職 名	氏 名
電子デバイス工学	教授	谷口 宏	コンピュータ・ネットワーク工学	教授	安西 人
	准教授	岡 英		准教授	倍谷 正
	准教授	西館 政		教授	西谷 正
	准助	向川 宏		講師	鈴木 泰
	助	小川 一		助	永平 仁
		叶野 榮			佐藤 貴
		三浦 真			藤岡 豊
					山中 克
電子システム工学	教授	恒川 隆	知能情報処理システム工学	教授	清二 久
	准教授	長田 洋		准教授	讓 彰
	准助	大本 尚		准助	山輪 森
		佐藤 宏			岩村 岩
					西三 兼
					木盧 木
電気エネルギー工学	教授	藤山 也	メディアシステム工学	教授	司 茂
	准教授	山高 弘		准教授	市博 也
	准助	成高 一		准助	司胤 也
				事務	裕則 晃
				補佐	忠卓 卓
					直克 直
					克 克
					ひか か

技 術 部					
工学系技術室	職 名	氏 名	情報技術室	職 名	氏 名
	技術専門員	千葉 茂樹		栗田 宏明	副技術室長
技術専門員	太田 康治	金野 哲士	技術専門員	栗田 宏明	
技術専門員	那須川 徳博	金野 頭上	技術職員	栗田 哲士	
技術専門員	星 勝徳	金野 上 浩	技術職員	栗田 頭上	
技術専門職員	萩原 由香里				
技術専門職員	葉千 寿				
技術専門職員	庄司 こずえ				
技術専門職員	志田 寛				
技術職員	藤本 甫明				
技術職員	佐藤 正重				
技術補佐員	藤 沼 雄				
技術補佐員	古 館 通				

平成 24 年 年表

1/10	理事会・新年会打合せ、会費検討委員会 会長・事務局 3 人・盛岡支部長・岩手大学工学部
1/14-15	大学入試センター試験
1/16	SPERC 講演会「高橋和貴先生の文部科学大臣表彰記念講演会」
1/23	「きたかみ」編集委員会、理事会・新年会打合せ、会費検討委員会 会長・鳥谷部副会長・事務局 3 人 岩手大学工学部
1/28	23 年度第 3 回理事会・70 周年記念事業第 7 回実行委員会 17 人 岩手労働福祉会館 盛岡支部・科会新年懇親会 24 人
1/31-2/1	平成 24 年度大学院博士前期課程第 2 期入学者選抜試験《平成 24 年 4 月入学》. 電気電子・情報システム工学専攻 10 名合格
2/2	平成 24 年度大学院博士後期課程第 2 期入学者選抜試験《平成 24 年 4 月入学》. 電気電子・情報システム工学専攻 2 名合格
2/2	入学願書受付締切. 電気電子・情報システム工学科：前期 1.9 倍, 後期 9.9 倍
2/8	「きたかみ」編集委員会 校正その他 会長・事務局 3 人 岩手大学工学部
2/9	草刈賞委員会 (草刈賞選考委員会) 選考委員 電気電子工学科：恒川佳隆 (電気電子工学コース長)・佐藤宏明 (4 年担当) 情報システム工学科：西山清 (情報システム工学コース長)・鈴木正幸 (教務委員) 電気電子情報科会：柏葉安兵衛 (会長)・太田原功 (相談役・委員長)
2/15	電気電子・情報システム工学専攻 (電気電子工学分野) 修士論文審査会
2/16	「きたかみ」編集委員会 校正その他 会長・事務局 3 人 岩手大学工学部
2/20	情報システム工学専攻 (情報システム工学分野) 修士論文審査発表会
2/23	情報システム工学科卒業論文発表会
2/21	電気電子・情報システム工学専攻博士論文公聴審査会 (情報システム工学講座所属 1 名分)
2/25	平成 24 年度個別学力検査前期日程. 電気電子・情報システム工学科 88 名合格
2/26	弔電 高木三郎氏 (電気 17 年卒 2 月 23 日逝去)
2/28	渡邊孝志先生最終講義「画像処理とパターン認識の研究を巡って」
2/29	第 6 回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・一環や地域とのコミュニケーションデザイン分野一主催＞ 招待講演「無線通信とクラウドコンピューティング」平栗健史氏 (日本工業大学電気電子工学科准教授)
3/1	電気電子工学科卒業研究発表会 岩手大学システム理工学系講演会 「10 年後の笑顔に乾杯！ 若手技術者のアイデアの活かし方」石橋政三氏 (株式会社チノー)
3/1	「きたかみ」58 号 (70 周年記念特集号) 発行 5300 部
3/1	年会費二重納入返却問合せ作業 86 通
3/8	新正会員歓迎会 71 人 (新正会員・院生 47 人) 岩手大学工学部生協食堂
3/12	平成 24 年度個別学力検査後期日程. 電気電子・情報システム工学科 17 名合格
3/16	「きたかみ」DVD 貼付・封入作業 岩手大学工学部 事務局・学生アルバイト
3/23	岩手大学卒業式・修了式 工学部第 60 回卒業生：電気電子工学科 71 名, 情報システム工学科 54 名 大学院博士前期課程第 43 回修了生：電気電子・情報システム工学専攻 41 名, 情報システム工学専攻 2 名 大学院博士後期課程第 14 回修了生：電気電子・情報システム工学専攻 1 名
3/31	情報システム工学コース 渡邊孝志教授 定年退職
4/1	三浦健司氏を電気電子工学コース助教に採用
4/7	岩手大学入学式 工学部入学生：電気電子・情報システム工学科 130 名 3 年次編入学生：電気電子工学コース 3 名, 情報システム工学コース 7 名 大学院博士前期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻 47 名 大学院博士後期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻 3 名
4/23	弔電 藤村泰造氏 (電気 23 年卒)
5/15	科会会計監査 及川二千朗監事・久保田賢二監事・柏葉会長・柳橋理事 岩手大学工学部
5/21	会長事務局打合せ 理事会提案事項について 柏葉会長・事務局 3 人 岩手大学工学部
5/21	科会平成 24 年度第 1 回会費検討委員会 鳥谷部委員長・柏葉会長・事務局 3 人 岩手大学工学部
5/26	平成 24 年度第 1 回理事会・科会 70 周年記念事業第 8 回実行委員会 24 年度総会提案事項審議・70 周年記念事業について
5/下 -6/上	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成 24 年 9 月修了予定者》および中間発表会《平成 25 年 3 月修了予定者》(分野別に実施)
5/31	平成 25 年度推薦編入学試験. 電気電子工学コース 1 名合格
5/31-6/1	電気電子工学コース スポーツ大会
6/1	開学記念日
6/9	【開学記念講演会】 記念講演 1「三陸復興の取り組みについて」野田武則氏 (岩手県釜石市長) 記念講演 2「海の生き物の生態とそこに暮らす人々との関わりについて」さかなクン氏 (東京海洋大学客員准教授), 岡本信明氏 (東京海洋大学長) 【開学記念園遊会】 岩手大学農学部附属植物園内
6/16	盛岡支部総会 岩手労働福祉会館
6/16	平成 24 年度岩手大学電気電子情報科会総会 26 人 岩手労働福祉会館 平成 23 年度事業報告・決算報告、平成 24 年度事業計画・予算 講演「70 周年記念祝賀会を終えて」寺井正行氏 (70 周年祝賀会実行委員長)
6/23	仙台支部総会 ハーネル仙台
7/2	岩手大学復興祈念銀河ホール落成記念特別講演会

7/5-6	記念講演1「東日本大震災の教訓を次代につなぐ」堺茂樹氏（岩手大学地域防災研究センター長）
7/10	記念講演2「未来を担う人材を育てるために」船崎健一氏（工学部附属ものづくりエンジニアリングファクトリー長）
7/19	記念講演3「工学部の新たな研究の方向性」藤代博之氏（工学部附属ソフトパス工学総合研究センター長）
8/7	平成25年度一般編入学者選抜試験。電気電子工学コース6名合格、情報システム工学コース3名合格
8/8	平成25年度大学院博士前期課程推薦入学者選抜試験。電気電子・情報システム工学専攻6名合格
8/20	会長事務局会議
8/20	オープンキャンパス
8/21	情報システム工学コース スポーツ大会
8/25	会長事務局打合せ 柏葉会長・事務局3人
8/28-29	科会平成24年度第2回会費検討委員会 鳥谷部委員長・柏葉会長・事務局3人 岩手大学工学部 電気電子工学特別講義 「Vision: color and intensity perception」Prof. Francis P. Dawson (University of Toronto)
9/1	平成24年度第2回理事会 24年度事業について 15人 岩手労働福祉会館
9/16	平成24年度大学院博士前期課程入学者選抜試験《平成24年10月入学》電気電子・情報システム工学専攻志願者なし
9/25	平成25年度大学院博士前期課程入学者選抜試験《平成25年4月入学》電気電子・情報システム工学専攻23名合格
9/下-10/上	平成24年度大学院博士後期課程入学者選抜試験《平成24年10月入学》電気電子・情報システム工学専攻志願者なし
10/1	平成25年度大学院博士後期課程入学者選抜試験《平成25年4月入学》電気電子・情報システム専攻志願者なし
10/5	弔電 吉島一郎氏（専門5卒）
10/10	一祐会70周年記念式典
10/15	平成24年度岩手大学修了式・卒業式（総合教育研究棟（教育系））
10/20	工学部卒業生：電気電子工学科1名、情報システム工学科1名
10/26	大学院博士前期課程修了生：電気電子・情報システム工学専攻 なし
10/27	大学院博士後期課程修了生：電子情報工学専攻1名
11/8	電気電子・情報システム工学専攻（電気電子工学分野）修士論文中間審査
11/9	岩手大学入学式（平成24年度10月入学者）
11/12	電気電子工学特別講義 「産学官連携でのづくり、そして地域活性化へ～共同研究の成果・ナビチャリの活用～」葛西純氏（有限会社 forte 代表）
11/16	オープンキャンパス（大学祭）
11/22	電気電子工学特別講義
11/30	「風力発電事業の計画と実践」鈴木和夫氏（株式会社日立エンジニアリング・アンド・サービス）
12/11	東京支部総会 東京ガーデンパレス 44人
12/14	輪祭り
12/19	電気電子工学特別講義 「ソフトパスエンジニアリングとアンビエントエネルギー収穫」馬場守氏（岩手大学名誉教授、岩手県立産業技術短期大学校校長）
12/21	「東日本大震災での被害状況を踏まえた電力施設の技術課題－電力流通設備を中心として－」佐藤清隆氏（一般財団法人電力中央研究所）
12/28	第9回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・－モノやコンテンツとのコミュニケーションデザイン分野－主催＞
12/31	招待講演「道具としてのビジュアルデザイン」鹿野護氏（WOW チーフビジュアルアートディレクター）
1/7	第7回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・－モノやコンテンツとのコミュニケーションデザイン分野－主催＞
1/14	招待講演「六角大王のモデリング技術」古島終作氏（株終作代表取締役）
1/21	平成25年度推薦入学試験。電気電子・情報システム工学科26名合格
1/28	第8回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・－人やコミュニティとのコミュニケーションデザイン分野－主催＞
2/4	招待講演1「ソーシャルメディアにおけるネットワークの分析とその活用」田中敦氏（山形大学大学院理工学研究科准教授）
2/11	招待講演2「コンピュータ適応型日本語テストの開発」今井新悟氏（筑波大学人文社会科学部研究科（系）教授）
2/18	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成25年3月修了予定者》および中間発表会《平成25年9月修了予定者》（分野別に実施）
2/25	第10回「コミュニケーションデザインセミナー」 ＜岩手大学工学部附属ソフトパス工学総合研究センター・コミュニケーションデザイン研究グループ・－モノやコンテンツとのコミュニケーションデザイン分野－主催＞
3/4	招待講演1「新秋田県立美術館におけるプロジェクトマップの企画と準備」伊藤茂之氏（株式会社ゼロニウム）
3/11	招待講演2「新秋田県立美術館におけるプロジェクトマップの実施と課題」黒川匡子氏（株式会社ゼロニウム）
3/18	「きたかみ59号」第1回編集会議 岩手大学工学部 会長・事務局3人
3/25	新年会打合せ 岩手大学工学部 旗福盛岡支部長・会長・事務局3人
3/31	電気電子・情報システム工学専攻（電気電子工学分野）中間発表会
4/7	岩手大学システム理工学系講演会、「テレビ会議「HDコム」における音響技術開発－收音技術の基礎から応用まで－」西川剛樹氏（パナソニック株式会社 R&D 本部）
4/14	平成24年度第3回情報処理学会東北支部研究会

岩手大学電気電子情報科会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は岩手大学電気電子情報科会と称する。
- 第2条 本会は盛岡高等工業学校電気科、盛岡工業専門学校電気科、並びに岩手大学工学部電気系工学科及び大学院工学研究科電気系工学専攻の傘下集った者の親睦を図り、緊密な連絡をとり、電気工学、電子工学、情報工学に関する知識を交換する。
- 第3条 本会の本部事務所は盛岡市上田 岩手大学工学部電気系工学科に置く。
本会に支部を置くことができる。支部の設置は総会の承認をうけるものとする。
- 第4条 本会は第2条に定めた目的を達成するために会誌の発行、講演会等を行う。

第2章 会 員

- 第5条 会員を分けて特別会員、正会員、準会員とする。
- 第6条 特別会員は岩手大学工学部電気系工学科の現・旧教職員とする。
- 第7条 正会員は盛岡高等工業学校卒業生、盛岡工業専門学校卒業生、岩手大学工学部電気系工学科卒業生、岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻修士、並びに役員会の承認を経た者とする。
- 第8条 準会員は岩手大学工学部電気系工学科の在校生並びに岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻学生のうち正会員でない者とする。

第3章 会 計

- 第9条 本会の会計は一般会計及び基金特別会計とする。
基金は将来のために積み立てるものとする。但し、その利息は一般会計に繰り入れることができる。
- 第10条 会費は準会員入会時に入会費として10,000円を納入する。また、卒業後10年を経過した正会員は年会費として10年毎に10,000円を納入する。
尚、納入した会費は理由の如何を問わず返却しない。
- 第11条 本会の収支は毎年4月末日に於いて決算を行い、会計監査を経て総会に於いて承認をうけ併せてこれを報告する。

第4章 会 議

- 第12条 会議は総会、臨時総会、役員会及び理事会とする。
理事会は、会長、副会長、理事及び相談役を以て構成する。
- 第13条 総会は毎年1回会長がこれ招集して出席人員を以て成立する。
- 第14条 臨時総会は役員会に於いて必要と認められた時、会長がこれを招集する。
- 第15条 役員会及び理事会は必要に応じて会長が招集する。

第5章 役 員

- 第16条 本会に次の役員を置く。
- | | | |
|------|------|-----------------------------------|
| 会 長 | 1名 | 正会員より選出する。 |
| 副会長 | 3名以内 | 正会員より選出する。 |
| 理 事 | | 正会員より互選する。
尚、各支部長は理事を兼ねるものとする。 |
| 会計監査 | 2名 | 正会員より選出する。 |
| 幹 事 | | 正会員より理事会で推薦し会長が委嘱する。 |
| 顧 問 | 若干名 | 特別会員より会長がこれを委嘱する。 |
| 相談役 | | 元会長は終身相談役として委嘱するものとする。 |
- 第17条 各役員の任期は2ケ年とし、再選できる。改選は総会に於いて行なう。
但し任期中欠員ができた場合は役員会に於いて選出し補充する。
- 第18条 会長は本会を代表しその事務を総括する。
副会長は会長を補佐する。
理事は本会の庶務を掌理する。
会計監査は会計を監査する。
事務局担当理事は本会の会計を掌理し、且つ金品物件の保管の責に任ずる。
幹事は会員相互の親睦と連絡の任に積極的にあたる。
- 第19条 支部に支部長を置き、本部に準じて役員をおくことができる。

第6章 会誌、講演会及び座談会

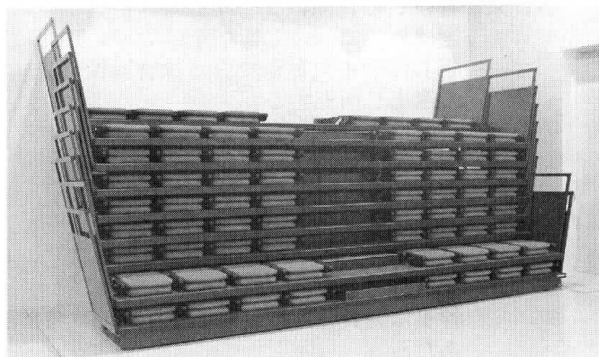
- 第20条 本会は会誌「きたかみ」を発行して会員に配付する。
- 第21条 講演会及び座談会は随時行う。
- 第22条 支部の内規は各支部に於いて定め、会長の認可を受けることにする。
- 第23条 会則の変更は総会に於いて過半数の賛成が無ければ変更する事ができない。

付 則

- 本会則の第10条の改定は、平成16年5月1日から施行する。
- (昭和17年1月1日制定)
(昭和25年度総会一部改正)
(昭和37年度総会一部改正)
(昭和40年度総会一部改正)
(昭和41年度総会一部改正)
(昭和46年度総会一部改正)
(昭和50年度総会一部改正)
(昭和51年度総会一部改正)
(昭和56年度総会一部改正)
(平成4年度総会一部改正)
(平成11年度総会一部改正)
(平成12年度総会一部改正)
(平成15年度総会一部改正)
(平成20年度総会一部改正)
(平成21年度総会一部改定)
(平成22年度総会一部改定)

「きたかみ」59号トピックス

2012年7月に、工学部敷地内に岩手大学復興祈念銀河ホールが落成しました。既に各種講演会やセミナー等に広く利用されているほか、同建物内には国立大学では珍しい女子学生専用パウダールームや、デザインメディア工学協創工房の移動式観覧席が設置されています。



編集後記

もうすぐ3月というのに、テレビでは記録的な積雪の報道をし、ここ盛岡も雪の多い、そして凍(しば)れる日が続いております。

「きたかみ」59号をお届けします。佐藤利三郎先生、高木元会長、佐藤元会長がお亡くなりになり、追悼文をお願いしました。その編集作業の最中に、井上隆志理事の訃報が飛びこんできました。入院はしていましたが、最近までメールが来ていましたので、まさかと思いました。

あの大震災・大津波・原発の事故から2年になります。帰省中に犠牲になった小笠原君は今年が卒業のはずでした。彼がこの大学のこの科に居たことを忘れてはならないと、担任と同期の仲間が寄稿してくれました。彼のご冥福を祈るとともに、被災地の一日も早い復興を祈らずにはられません。

ご寄稿いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。また、至らぬ点があるかと思いますが、お許しいただきますようお願いいたします。

編集委員 柏葉 安兵衛 (会長：昭和38年電気卒)
長田 洋 (事務局：昭和62年電気卒)
木村 彰男 (事務局：平成3年情報卒)
柳橋 好子 (事務局：昭和45年電子卒)

お知らせ

佐藤裕郎氏(専門1回生、元仙台支部長)に草刈功労賞を差し上げました。

元電気科会仙台支部長佐藤裕郎氏には、科会に対するご功績に感謝して、一昨年科会創立70周年式典にて、草刈功労賞を贈呈することになっておりましたが、連絡がつかないため差し上げることができませんでした。その後、同級生の阿部源祐氏から佐藤氏はお元気でいらっしゃるとの連絡がありましたので、遅ればせながら昨年6月に会長が東京のご自宅にお伺いし、失礼をお詫びして功労賞を差し上げました。佐藤氏は大変お元気で、受賞を喜んでおられました。

きたかみ 第59号

発行日 平成25年3月1日
発行者 盛岡市上田4丁目3番5号
岩手大学工学部内
岩手大学電気電子情報科会
☎019-621-6381
印刷所 (株)阿部謄写堂
盛岡市本町通2丁目8番37号
☎019-623-2361

平成 25 年度総会並びに懇親会開催のご案内

平成 25 年度の電気電子情報科会総会は、下記のように開催することになりましたので御案内申し上げます。なお、盛岡支部総会も併せて行います。会員各位の多数のご参加をお待ちしております。

なお、住所や勤務先等の確認にも使用させていただきますので、綴り込みのハガキで総会への出欠を、1ヶ月前の平成 25 年 5 月 15 日までにご連絡を頂きたくお願い申し上げます。

記

日 時 平成 25 年 6 月 15 日 (土)

盛岡支部総会	午後 2 時 30 分～ 3 時 00 分
総 会	午後 3 時 00 分～ 4 時 00 分
講 演 会 等	午後 4 時 00 分～ 5 時 00 分
懇 親 会	午後 5 時 00 分～ 7 時 00 分

場 所 岩手労働福祉会館
盛岡市大沢川原 2 丁目 2-32
TEL 019-651-7961

議 題 1. 平成 24 年度事業報告、決算報告承認
2. 平成 25 年度事業計画案、予算案審議
3. その他

講 演 会 演題「東日本大震災～報道現場から～ (仮題)」
講師：宮 手 敏 雄 氏 (昭和 44 年電気卒)

懇親会会費 5,000 円 (懇親会席上で、昨年秋・今年春に叙勲された方を御紹介し、祝意を表します。
叙勲された方を御存知の方はお知らせ下さい。)

連 絡 先 総会出欠・叙勲された方の紹介等、会誌「きたかみ」に綴り込みのハガキを使用するか、
下記事務局宛電話、FAX 又は E-mail 等でご連絡下さい。

岩手大学電気電子情報科会事務局 (岩手大学工学部電気電子・情報システム工学科内)

長 田 洋 TEL・FAX 019-621-6381

E-mail osada@iwate-u.ac.jp

木 村 彰 男 TEL・FAX 019-621-6488

E-mail kimura@cis.iwate-u.ac.jp

柳 橋 好 子 TEL・FAX 019-686-2253

E-mail t.k-yngbs@nifty.com